

琉球大学学術リポジトリ

[書評] 北村毅(KITAMURA,T.)著 『死者たちの戦後誌
：沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山城, 新 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33945

[書 評]

北村 毅 (KITAMURA, T.) 著

『死者たちの戦後誌——沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』

お茶の水書房 2009年 428ページ

山 城 新 (YAMASHIRO Shin)

最近の沖縄関連研究において、歴史的主体を批判しつつ、新たな主体性を再考するための研究書が出版されるようになってきた。本書も沖縄の戦後についてこれまでの研究とは違った視角から第二次世界大戦後の沖縄と日本を提示しようと企図する意欲的な研究書である。具体的には、「遺骨収集、記念碑の建立、慰霊祭、戦死者供養、戦跡巡礼(巡拝)、戦跡観光など、1940年代後半から2000年代までに沖縄の戦跡で行われてきた諸実践」が分析の対象となり、その析出のために、これまでの戦後研究ではあまり扱われることのなかった様々な私的・公的記録を駆使している。そうして、死者と生者を含む「戦死後」の人々の営みを「関係史」としてとらえ直すことが、本書の主題となっている。

生存者たちの証言を基に沖縄戦直後の廃墟と荒野の中に散乱していた死体や遺骨の風景描写から始まる第1章「さまよえる遺骨——戦死者が『復帰』する場所」では、沖縄で亡くなった戦死者の遺骨の扱われ方の経緯が詳説されている。戦後復興とともに遺骨はやがて人々の生活空間から物理的に切り離され、日本国家の一元的管理下におかれることになるが、しかし同時に政治的な遺骨処理問題として社会の中にたち現れる。本章ではその一連の問題の発生経緯と構造を多様な史料を基に分析していく。例えば、1952年以降、日本政府はサンフランシスコ講和条約発効後の戦後処理の問題として国民の要請に応える必要があったし、戦後の救護法の適用を受け経済上の恩恵を受けるために、当時の琉球政府はいわゆる「祖国復帰」の契機として戦死者の慰霊と追悼を政治的に利用したいという思惑も絡んでいたと指摘する。その政治的文脈の中で、日本の大手新聞紙上で多数の日本兵の遺骨が沖縄の地で「野ざらし」になっているという報道に端を発し繰り広げられる遺骨処理問題について、戦後沖縄思想史で展開された日本同祖論に似た構図の中で論じつつ、当時のぎくしゃくした日本と沖縄の関係史を「戦死後」から読み直している。

第2章「『復帰』へといたる『病』——ひめゆりの塔と『沖縄病患者』」では、1960年代以降沖縄文化が本土資本に消費される過程で蔓延する「沖縄病」について、「ひめゆり学徒隊」の心象イメージがどのように造られ流布したかを解説する。ひめゆりの塔をめぐる展開する小説、映画、観光業などがいかに「哀悼共同体」を形成し、「復帰運動においてひめゆりの自己犠牲のイメージのうえにみずからの自画像を重ね合わせたか」と論じる。更に、沖縄病の罹患プロセスにおけるバスガイドの「語り」の機能分析を行い、戦後日本で母性の果たした役割と同様に「無垢」なひめゆり学徒の戦死者が戦後日本社会に「犠牲者」として召還されることによって、戦死者全員の無垢性に置き換えられ、また「戦後日本社会はひめゆりのイメージを流用＝領有することによって、戦死者一般の戦争責任をも冤罪していた」と考察する。

第3章「『父』を亡くした後——遺児たちの戦跡巡礼と慰霊行進」では、ヒット曲「さとうきび畑」の歌の分析からはじまり、さとうきび畑の中を「父親たちの死の痕跡にみちた場所」として訪れる遺児たちの慰霊の日をめぐる巡礼のなかに「自分たちの来歴」と「父の痕跡」の両方の探

求があったとし、日本遺族会の沖縄戦跡をめぐる実践の歴史的経緯と遺児の自己探求プロセスを重ね合わせる。その過程において「『血』のイデオロギー」が戦死者と遺族の間の身体的経験を同一化するものとして稼動し、同時に「『平和』のイデオロギー」と連動していくことによって遺族共同体の形成に大きく作用し、沖縄戦の戦跡は、それらの諸力学が効果的に働く場所として、あるいは、遺族の求める父親の呼びかける声を提供する場所として機能していたと分析する。

第4章「戦死者の魂^{マヱ}が語り出すとき——戦後沖縄の心象風景」では、組織体制の変遷史あるいは思想史的な分析とは対照的に、沖縄戦の二四万余の戦死者と残された遺族の関係性はどのように構築されていったのかという個人レベルの戦死後に焦点が当てられる。「生き残った者が、死者の存在をどのように観念していたのか」という問いを立て、戦死者の供養や祭祀においてユタが生活空間と精神世界をどのように繋いでいたのかということ、一人のユタのライフヒストリーを中心に展開し、民俗的慣行「ヌジファ」の実践について解説している。しかしながら、論は単なる実践報告にとどまらず、靖国神社をはじめとする「国家的慰霊システムから取りこぼされた戦死者を救い上げ、さらには、そこに囲い込まれた（すなわち靖国神社に『合祀』された）戦死者一人一人を家族のもとに取り環していく過程であった」とし、そのほかにもユタの口寄せを介さず、各々で戦跡や戦没地を巡礼しながら悲しみを癒す人々の私的な戦死者供養のあり方の重要性についても指摘することによって、本論を沖縄民俗風習の固有性や特異性にのみ回収する危険性を注意深く回避している。

第5章「風景の遺影——摩文仁の丘の戦後」では、摩文仁の丘の物理的風景が荒野からさとうきび畑そして平和祈念公園へと変化する過程を示しながら、そこにどのような政治的取捨選択がなされてきたかを「風景の遺影」をめぐる問いとして展開している。第1章でも言及されている1960年代の霊域整備事業によって開発が進められる過程の中に、慰霊塔・碑の維持管理をめぐって台頭してきた「奉賛会」が霊域管理事業を取り仕切る過程で摩文仁の指定霊域が「靖国神社の支部、地方出張所として、『護国の神』を祀る場所」になったと論じる。更に多くの記念碑や公園で「平和」の名を冠する全国的な当時の傾向について述べながら、記念碑が「復興」や「繁栄」など言葉と並びつつ高度成長期の日本を形象化し、同時に敗戦の記憶と「日本人」を言祝ぐ傾向があったとし、摩文仁の丘にも「沖縄を国民国家の外延として再定義しようとする欲望」が発動していたと指摘する。そのようなナショナリズムの危険性への警戒心を持って「平和の礎」の建設は始められるが、一九九九年の稲嶺恵一県政下の新資料館の展示改ざん問題に見られるように、「ポジティブな沖縄」を演出するような政治的介入があったり、2000年に来沖したクリントン元大統領の演説の中で沖縄問題を隠蔽するような文脈に置かれたり、絶えず忘却と隠蔽の政治的力学に利用されてきたとする。しかしながら、一方で、平和の礎の特徴として「あくまでもローカルに（家族単位で）戦死者を想起しようとする点に特色があるのではないか」とし、礎に刻まれた「名は、戦死者の固有性を保たせつつ、生者の前に確固たる存在証明を証しているのである」と本章を結び、グローバル時代に果たしうる礎の役割も確認する。

以上、本書の議論の要点と流れを確認した上で、更に筆者のアプローチについてまとめてみたい。何よりも、本書の価値はそこでの議論や解説される史実にのみあるのではなく、論じ方にも示唆的なものがあると思われるからである。まず、著者がその名を著書の中でもしばしば用いているように、ミシェル・フーコーの規律＝訓練や監視といったテクノロジーの分析の実践例として本書をみることができる。つまり、身体がどのように権力によって規律化され、用立てられ、再編されるような従順さをつくりだすように働きかけられているかについての分析である。本書では、具体的に骨や血という身体部分あるいは遺品に身体が分割され、全体的な管理と効率化に役

立てられていたということをはっきりしている。遺骨や死者という生者の社会の匿名性の中に作用した権力とその組織化が沖縄の戦後には主に「復帰運動」や国家的ナショナリズムと折衝しながら稼働していたかを批判的に論じる。しかしながら、一方で、筆者はそのようないわゆる近代的個人と権力システムの二極で沖縄の戦後を単純化することには警戒感を持っている。例えば戦跡巡礼において、ユタという間主観的存在によって果たされた慰霊の役割について指摘している一方で、先述したように逆にユタの口寄せを介することなく個別に執り行われた個人的な慰霊儀式の存在に言及しているし、その他にも様々な個人的な悼みの在り方を取り上げているからである。また、遺骨や戦死者、旧植民地出身者の遺骨処理問題や「無名戦没者」の存在を指摘することによって、従来の戦後沖縄研究であまり言及されることのなかった沖縄戦の更なる暗部に光を当て、今後の沖縄研究の可能性も示唆しているといえる。

本書で展開される沖縄戦を対象として戦死者の死後をめぐるさまざまな問いは、しかしながら、大きな悲しみの上に成り立っている。それは、24万人余の多数の戦死者を出した沖縄戦を語る上で不可避の感情であり、その数を上回る遺族の悲しみと共鳴しており、更に、今の時代の危機感に支えられているのだろう。「戦争の痕跡の一切切が消失していこうとする現在において、せめて失われた戦争の痕跡のささやかな目録をつくらうとする試みともなろう。」序章で語られる「戦争の痕跡のささやかな目録」として献上される本書は、死者へ寄り添う視点がある一方で、その悲しみを、今とこれからを生きる者たちへと伝えていこうとする試みである。序章の第2節は「本書の議論をより理解するために」では、沖縄戦と本書を理解する上での基本的な問題構造と歴史背景を概説すると同時に、「慰霊の日」や「終戦の日」の違いや、「沖縄」と「日本」のそれぞれの戦後処理の違いと問題点などを丁寧に説明しているのは、そのような筆者の態度の表れとも読める。これからの世代にとって「戦後」という時代理解が今後ますます学問的課題になることを考慮に入れると、このような沖縄研究における基本的背景としての知識や情報の扱い方は、一つの参考例としても考えられるだろう。

したがって、本書で照射されるのは直接的には戦死者をめぐる戦後史であるが、本質的には「死」という私的で個別に絶対的な出来事が過去と未来の共同体を巻き込み、存続させていくという側面である。死は一人では完結させることはできず、また、死に限っては、社会の成員の誰も欠落させることもできない。しばしば言われるように、私たちは、自分の死を経験することはできない。できるのは他人の死のみであり、そこに他者性を認識し、顧みて自己の来たる「死」に擬似的に直面し、結果的に他者と自己との離れがたき関係性を理解するのである。本書はそのような意味において、究極的には「わたしたち」についての本である。もちろん「わたしたち」は誰を指すのかについては、読者に委ねられているのだが。

読後にふと『ニューヨークタイムズ紙』に掲載された“Okinawa: The Bloodiest Battle of All” (1987年)という短いエッセイを思い出した。シュガーローフの激戦を経験した米国従軍者の視点から、美化された戦争体験や戦死について批判的に書いている作品であるが、たとえば、この作品に間接的に言及されているような米軍人たちの戦死後にはどのように考えられるべきだろうか。本書で血のイデオロギーは主要概念であるが、マンチェスターのエッセイに奇しくも「bloodiest」な戦闘として再び現れる「血」と「沖縄」の並列は、単に戦争という名詞に付随する形容詞としての統語的な関係によるものだろうか。戦後処理の諸問題において、敵としての米軍人の死は、あるいは、米国側の政治的、文化的価値観はいかなる影響を与えただろうか。本書の議論では1955年に米国民政府が遺骨処理をめぐる過程において示した政治的懸念に言及しており、その情報のみに依拠するならば、米国民政府をはじめとするアメリカの存在は、沖縄の戦死後にそれほど影響を

与えなかったように読むこともできる。

沖縄戦の、そして沖縄の戦後の特徴の重要な部分に米軍の存在がある以上、「アメリカ」は今後の戦死後の議論の課題として避けられないであろう。何よりも戦死後や遺骨や血といった本書の主要概念が魅力的なのは、それらが匿名性を帯びているが故に、私たちの価値観がそこに映し出されるということ、そして本書の議論が示しているとおりに、それらは私たちに亡霊のごとく憑依し、陵駕してしまうということである。もちろん断っておくが、本書の主題は日本と沖縄の関係を戦死後の人々の営みを「生者」と「死者」の「関係史」として捉えなおすことであるので、「アメリカ」という存在を戦死後の思考に持ち込むことは、本書の意図するものではないだろう。むしろ、本書によって明らかにされた沖縄研究の新たな可能性であり、戦後を考え創っていく者たちに突きつけられた今後の課題として捉えるべきである。ちなみに本書は2009年度タイムス出版文化賞(正賞)を受賞している。

(琉球大学)